牛の肝

帯広食肉検査事務所・帯広畜産大学家畜病理学教室出題　第26回獣医病理学研修会標本No.462

動物：牛，ホルスタイン，去勢雄，２才。

臨床的事項および肉眼所見：昭和60年４月18日，北海道十勝管内豊頃町より健康畜として帯広食肉検査所に搬入された。肉眼検査時，肝臓の横隔面に約1.5㎝程の表面顆粒状で黄白色の硬い結節１個が認められ，採材された。

組織学的所見：病巣は壊死巣（屢々石灰化）中心に類上皮様細胞，様々な形をした巨細胞よりなる典型的な肉芽腫巣の集合として観察された。（写真１）。壊死巣内に好塩基性の菌糸様糸屑様物が屢々観察された（写真２）。この菌糸様糸屑様物はギムザ染色においてより多数明瞭に観察された。これらの糸屑様物はコッサ染色に陽性であった。レフレルのメチレンブルー染色において石灰化の認められない壊死巣内に糸状の菌糸が多数認められた。この菌糸はグラム染色（Brown & Brenn法）にて陽性を示すとともに，好酸菌染色（Fite法）にて一部が陽性であった。グロコット染色において菌は細い糸状で分岐が認められ，レフレルのメチレンブルーに陽性の菌はノカルディア菌の形態および染色性に一致するものであった。コッサおよびレフレルのメチレンブルー重染色の同一切片においてレフレルのメチレンブルー陽性の領域とコッサ陽性の領域が連続して観察された。また石灰化巣の辺縁部にレフレルのメチレンブルー陽性の菌糸が多数認められる傾向にあった。

組織学的診断およびまとめ：肝におけるノカルディア性肉芽腫性病巣。ノカルディア菌は通常のＨＥ染色標本においては判別できないとされている。本提出標本では病巣中心部壊死巣内にヘマトキシリンに陽性のノカルディア菌を思わせる糸屑様物が多数認められた。レフレルのメチレンブルー単染色，コッサ単染色，そしてそれらの重染色の結果より，ＨＥ染色で認められた糸屑様物はノカルディア菌に石灰が沈着したものと思われた。